

增補雅言集覽

三十六

813.6

I 619g

Wng

Kodak Gray Scale

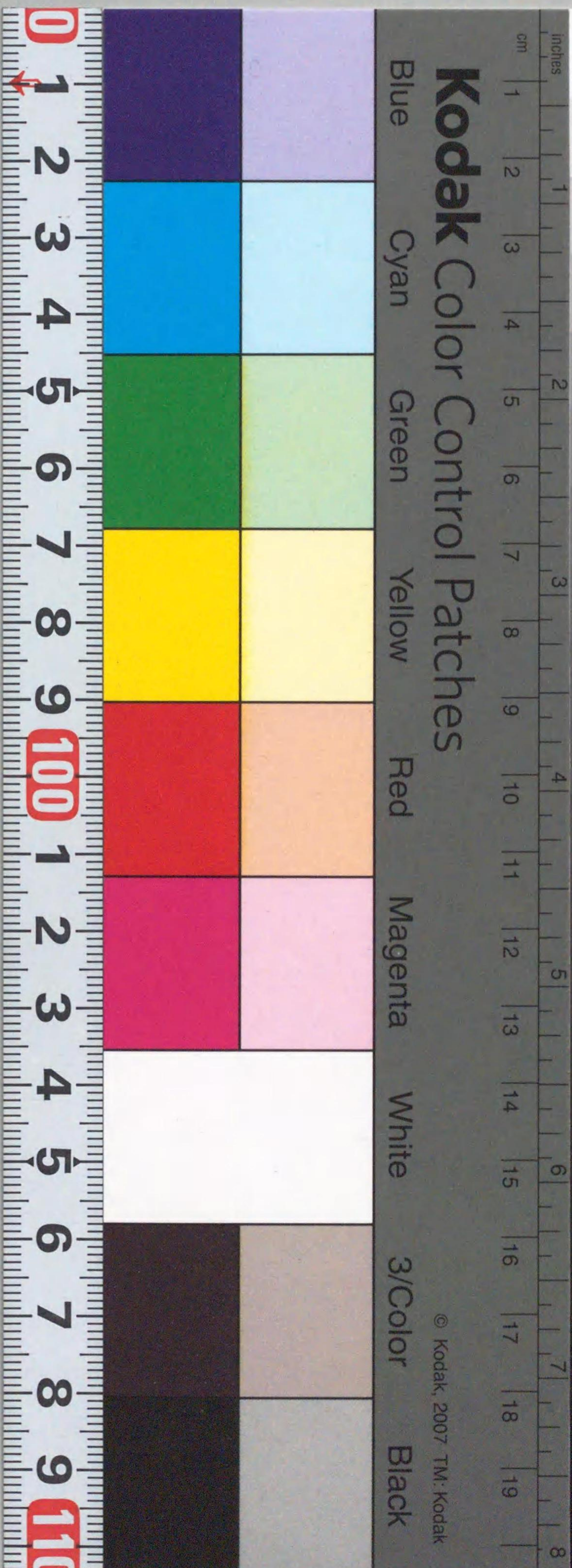
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



813.6
L619g
NND



691352

増補雅言集覽卷之卅六

石川雅望集
中島廣足補

○末の部

ま間(枕)九御前ちかくい云々次の間も長すびつよまかくるたる人々云々(狹)四上
齋院の御まへの櫻いみトきささりなるをつれトあるひるつうた御くあけの間
よるざり出させ給ひて見わたさせ給へるよ

○一間二間(源朝顔)五西おもてよみろうまるりたれどいとひ聞えがやあらん
もいろとて一間二間のおろさき

○二の間(源若菜)上ノはより西の二の間のひんがいのそをかれバまぎれ所もあ
くあらへよみいれらる

○ふた間(源未摘)五ふたまのまあるさうしてづらいとよくさして
○すみの間(源空蟬)三我のまをすみのまより(同未摘)廿すまのまばかりよぞ
いとさむけある女房

ま間(古)春下「むるがすえ何りくすらんさくらをあらるまをたよもえるべきもの
貫之

を(源浮舟)十ありやかゝやをきりぬまのこえかゝんもそづり(同蓬生)十雪あら
れがちよ外よのきゆるまもあるを(枕)六御ウへりそやかとあれごとみよも聞え給
ひぬを關白殿詞あよがうがと侍れひのき給ひぬなめりさらぬをりのまもかくこれより
ぞ聞え給ふかるかと申給へば(同)十二ありらさまよ物へまくりりとり間よきたあ
く侍る所のやけ侍りよーりバ(源御法)十人のきりぬまよ(同夢の浮橋)十人きりぬ
まよよびよせ給ひて(新續古)誹諧親房「うるらめやありでひさのま泥柱ひとまひ
とまにおもひたつとひ

○まかく(古)戀二「こが戀よくらぶの山のさくら花まかくちるとも數のまさらど
是則
(貫之集)上「もみぢのまなくちりぬる木の本のあきのけこそこのくらざりけれ
五
(後)戀二「白かこのよするいそまをこぞ舟のかちとりあへぬ戀もするりな
黒主

○ま(拾)夏公忠「行やらで山路くらいつほとぎす今一こゑのきりまよーさま(拾)
雜春よみ「もろともよをりし春のこひくくてひとり見まうき花盛りな
人しらす
○まく(新續古)雜下無「ふーみ山むりーのあとの名のこしてあれまくをーき代
品親王
々のふるさと(新後撰)秋上「秋風よふそのせきやのあれまくをーくらぬまで月
信實
ぞもりくる(續千)戀三よみ「ちはやふる神のいぐきもこえぬべー大宮人の見まく
人しらす

はーさま(古)雜上よみ「おもふとちまとるせるよのあらよーきたまをーきも
人しらす
のよぞありける(續後撰)春中如「そむ人もあひれいくよの故郷よあれまくーらぬ
願法師
花の色りか(月清)上旅「出ーよりあれまくおもふ故郷よねやもる人をたれと見る
らん

○ま(馬)万十七四十九「うさり川わたる瀬おそこのあが馬のあがきのとづよきぬ
れよけり
補 まい(源橋姫)四十とちのくよかよ五六まいよ
二

まろ丸(應神紀)八のくそ人かまー大みきうまらよきこーもちをせまろがち(和泉
式部集)上「つまかーといふのまろやひりせならぬきくよーもこそ心おくるれ(拾)戀
よみ人「旅人のかやりおそひつくるてふまろやひ人を思ひわさる(土佐日記)あ
いらす
る人の子のわらひなるひそりよいふまろ此歌のかへーせんと云(源帚木)卅まろがち
一よ寝侍らん(同御法)十紫ノ上病ノトキ丸が侍らざらんよ覺ー出あんやと聞え給へば
句答いと戀ーかりかん丸の内の上よりも宮よりも母をこそまさりて覺ゆれ(同夕
霧)六十。雲井ノいづこととおそーつるぞまろのそやうーよき常よおよどの給へばお
五ノ詞
なとくありさてかんとてどの給ふ(枕)十四又いよこかそして丸の何り只あらん

よまりせてとあといひて例の君なぞよくまる(源手習)六十。小宰相ニ向ヒ丸のいとほ
 べき事ぞあるや(枕)十。左京ノ君ヨリ清いとトウ隠させ給ひし事ありゆめく丸
 が聞えたるとかく後よもとあれ(同)五。方ニケイ舍后宮ノまろがもとよいとをか
 けけかるさうの笛こそあれ故殿のえさせ給へりとの給ふを(源空蟬)七此さうト口よ
 まろのねさらん(同)夕顔八まろあれバさやうのものよのおとされトとて(枕)八。七。
 宣方碁盤侍りや丸もうさんと思ふのいり(同)七。行成まろり文をかくし給ひ
 ける(源空蟬)十煩のいくてまろぞといらふ(同)玉葛十娘どもあよまされどまろの
 まして物も覚えせとてるされバ(金葉)八。下よみ「とくまのし駒のつまづく青つゞ
 ら君こそまろが不どしかりけれ(源橋姫)卅。カナルニ向ヒまろからまりバトウ
 らみ給ふ(同)花の宴五まろのみあ人よゆるされバめしよせりともあでふこと
 りあらん(竹取)下宮つこ丸が手よ生せる子よてもあらせ云御門仰せ給そく宮つ
 こ丸が家の山もとちり、あり(宇治拾)九。九さも候をままさゆきまろがくやう一奉
 るかりといふ(後拾)戀四「あやふしと見ゆるとどえのまろはしのまろあまかる
 物思ふらん(和泉式部集)上何れの宮よりおもしけん白川の院よまろもろともよお
 ひてかくりきて家もりよとらせておもしぬ云まろが口つさひよ(源楨桂)卅。九。サ

ナキ兄弟ノ詞

まろよたをらんてよをあてあそづの原のうづらがりせん(拾)戀三よみ「あつくさ
 のしけみよおふるまろこをあまろがまろねよいくよへぬらん(月清)上「うちとけ
 て誰よころもをかさぬらんまろがまろねもよふりき物を(源寄生)五十丸ようつく
 しくこえ給へりし人のまこしをやぎたるよ(金葉)戀下よみ「つの國のまろやの
 人をあくた川君こそつらき瀬々の見せしり

まろいぬ九犬(狹)一上四又ありつるかしらつきもまろいぬと見わきもこをまれ

まろをし(源末摘)廿大鼓をさへ高樓のもとよまろをしよせて(同)朝うが廿わらの

べおろして雪まろをしせさせ給ふ云々いとほうまろバさんとふくつれれど
 まろをし(著聞)下馬副引まろをりされて馬ををて、なり(同)同くトりまろを

しけれバ

まろをし(後拾)戀四「あやふしと見ゆるとたえのまろのしのまろあどかるも

のおもふらん(風雅)雜中「まをらをが山がつつきてをむ庵のそともまわられ杉

のまろ橋

まろをし(千載)誹諧空「おそろしやきそのりれちのまるきをしふみる

たびよおちぬべきりな

まろがれ(源 朝顔)九十まろがれたる御ひたひ髪ひきつくりひとまへと(とりりへと

や)上御ひとひ髪もあせまろがれて(源 楨柱)十十一髪云々涙まろがれたるいと

あそれかり補源夕霧二御ひたひがそのぬれまろがれたるひきつくりひ

まろがれあふ(狭)一十三下我もくときぬを引りつきつひとつよ丸がれあひさる不

そよ云々

まろがし。今クルノトイフ(枕)四一。常陸介さぞ名いたつくとかいらをまろ

かふるいとくよくければ(源 東屋)廿廿あらりあるあづまぎぬどもをおしまろ

がしてあやいでつ

まろがし(源 手習)五四十まろあるかいらつきども行ちがひさわぎさるも例よかそ

りていとおそろしきあち(狭)一四十上ものこのすあしあきたるよりまろがしらの

ふとみゆるい此御車を見るるべし補宇治拾九一廿まろがしらよて

まろね(夫)廿廿五「おふとものまつのそひねと枕よてたかしの瀆まろねしてねり

(源 東屋)一六十かゝるよもぎのまろねまらひ給とぬあち(万)十八廿九まくらま

らせひもとかせ末呂宿すれば(同)九三十ひもとりせまろねをせればとがきさる衣

いなれぬ(源 葵)四四十「夕されば丸ねをる身のわびしきよあく日ぐらゝの聲や何か

り(万)十二卅五「ときも子があをいぬぶら草枕旅のまろねよ下ひもとけぬ(狭)十四

ありまろねの心づくしかりをまよひいあゝろやすくときちらして打ふ給ふ

まも補拾戀三よみ「夏草のいぢまおふるまろこそけまろがまろねよいくよへ

ぬらん(千載)二戀二「おもひさやあちのそがきりきつめてもよもおかまろね

せんとい。瀆臣云まろねの帯をもとりせ着のまよてぬるをいふ木のまろ殿の荒

木のまよにてけづりまがぬ木もてつくれる殿あゝのまろやのかりつめる蘆もて

つくりませかりをめにさふまきに茸おふひ屋かりまろの詞すべてこれらにて心

得べし(万)廿卅九「くさまくらたびゆくせが麻流彌世婆いとあるわれひもどろ

せねん(同)廿四十「くさまくらたびのまるねのひもたえはありでとつらろこれのそ

るもし

まろらり(源 寄生)五九十かひなをさし出さるがまろらりまをりしやある不ども

補まろや(金葉)秋經信「ゆふされば門田のいおとおとづれてあゝのまろやに秋風ぞ

ふく

まろらて(字治拾)六二まくまうつに七八千枚ようちつこれをまろけてみかりもん人

もがあら。契沖云まろながらかり
まろぶたま(六帖)五「まろぶ玉あふ事つひにあるものを打てへおひばあどかとおもふ

まろぶ(東關紀行)まどろむ間たよなりりつる草の枕のまろぶ(堀次)一
夜戀「まぢわびてこよひはりのまろぶ(續世)いく度これねざめ(つらん)
顯仲
繼(六ノ)御やまひの程などもまろぶ(夫)廿「そ
る山のさゝやの床のまろぶ(鳥のねさあ)明ぬこのよ(夫)廿
家「そ

補 まろこす(蜻蛉日記)下「うちそそきみひとり見よまろあすけまろ(人)す
か(といふ)かり(拾)戀(三)よみ「夏草の(け)みよおふるまろこをけまろがまろねよ
いくよへぬらん

まろび(源 蜻蛉)二此水のおととまひをきくまわれもまろびいりぬべくりか(く)
補
宇治拾(十一)うつぶ(ま)りまろびぬ
まろびより(狹)四中人づて(聞)え給(ん)もいとかたトけなき心ち(給)へ(せ)ち
よ(め)らひ給ひてそこ(ま)ろびより(詞)云々

まろび(源 總角)廿まどけ(ま)ひあつきほどかれ(す)こ(ま)ろび(の)きてふ(た)ま
五

へり

まろびおち(源 御法)七御送りの女房(ま)して夢ち(ま)どふ心ち(し)て車(よ)りもまろ
びおちぬべきをもてあつりひける

まろびあひ(拾)戀(二)人丸「竹の葉におさるる露のまろびあひてぬるとい(か)に(と)つ我
名(り)を(催)馬樂(あ)夕(ま)きやと(う)く(ひろ)はりやと(う)く(さ)りて(ね)され(も)ま
ろびあひ(ま)はり(と)う(く)かよりあひ(ま)けり(と)う(く)(夫)九長方「ま(ま)か(こ)ふ園(の)う
り(ふ)の(一)つら(ま)かり(と)から(ま)ろびあへ(か)

まろ(せ)ゞ(源 賴政集)下「思ふ事下(ま)も(ま)る(ま)ろ(せ)ゞ(の)つゆ(さ)り(た)ま(か)を(い)
ま(か)ひ

ま(ま)り(四)季物語(月)十二まど(づ)り(ま)といへ(ま)さら(ま)め(か)どの(う)を(心)ぶ(ど)の御
ま(ま)りの(ま)ま(ま)り(れ)て(同)を(け)らの(も)ち(ひ)つ(ぐ)ま(の)鳥(あ)ど(や)きて(奉)り(御)くれ(い)
ひの御ま(ま)り(ま)奉(れ)ば

補 ま(ま)る(宇治拾)一わが(あ)たる(う)つは(木)の(ま)へ(ま)る(ま)り(ぬ)(同)二例(の)ぬ(い)
來て(局)は(入)ぬる(い)と(つ)け(ま)り(て)か(な)た(こ)か(た)の(門)ど(も)を(さ)り(ま)り(て)(同)三あ
ゆ(き)ま(ま)り(て)い(夫)廿七「山(が)らの(ま)い(は)くる(ま)の(と)よ(ろ)く(に)も(て)あ(つ)り(ふ)い(心)
光俊

かりけり

まどどりま裸 (宇治拾) 十二 まどどりあてたふさきさわりせいで

まさら(詞花) 戀下「あふ事ハまさらよあめるいよをたれいよく我をこびささるりな(夫) 四 範宗 「をもつせの山ハさくらよかりにりまさらよみゆる峯のときハ木

(同) 六 清輔 「まやの池のときまよ立る杜若波のおればやまさらなるらん(千載) 旅 師俊

「そりまぢや須磨の關やの板びさ一月もれとてやまさら成らん(補) 万代) 戀四 有家 「戀

をのこつねにぐる、檣のやのまさらよまよおとづれよか(新後撰) 冬 宗秀 「梢

をばまばらよかして冬がれの霜のくちまよあらふくあり(續千) 雜中、衣笠 内大臣 「まさ

らかる眞柴の扉あけくれハみねのあら一の何たくらむ(万代) 戀一、法性 寺入道 「山里の

まやのうをぶきまさらよてあそぬ思ひよかぞやひまさき(後拾) 冬 公資 「杉の板をま

さらけふける閨の上よおとろくむりあられふるら(千載) 冬 俊成 「まさらなる檣

の板屋よおととしてもらぬくれや木葉ふるらん

まをゆく(源 末摘) 廿 手探りのさどくさあやう心えぬ事もあるよや見て

がなと思せとけさやりよとりあさんもまをゆく(同 葵) 九 いとまをゆきまでねび

ゆく人のかさちるか(同 蓬生) 廿 所のさまよりそとめまばゆき御ありさまなれば

(同 葵) 三十 人あひのり給へるよつ、まれてそりあき御いらへも心やなく聞えんもま

まゆーり(同 柳) 卅 太子おぢたりといとゆるらうまをいたるを大將いとまをゆく

と聞給へどとりむべき事か(同 葵) 九 かたちをがたまをゆくとのへて(同 横笛)

二昔せいのふ獨をといさても罪ゆるされ侍りけり是ハまをゆくなんとて。宣長云

此笛ヲフカンフハマバユシトイヘル也(同 胡蝶) 十 おおさまの事のまをゆれば

えうち出給ハせ(同 句宮) 二 夕よいとあべてあらぬ御有さまなめれどいとまをゆき

さハよおせせざるべいたゞよの常の人さまよめでたくあてよなまめりく(同

帚木) 廿 四 かひひきたるつまおとかどあきよのあらねどまをゆきこ、ちかん侍り

注宣長云ウルサク思ハル、心バヘナリ(同 松風) 三 さらよ都のをみりもとむるを俄

ままをゆき人かりいとそいたあくむなりびよける心ちもづりあるまどきを(庚

申夜奉納和歌) 序 ありるまどるよさふらふことさへまをゆければ(空穂 國讓) 中、五

つれくあるよかきあらせつれなやまをゆくやあどらへバ(同 俊蔭) 廿一 あり

さり光るやきてみる人まばゆきまで見ゆ(源 浮舟) 六 宇治より文來る時 さをが

まそれ浮ノからん時よと覺をよいとまばゆければ(詞 ありてそんよゑんとや給ハ

んとそるとの給へバ(同 東や) 四 まばゆくまぐるうあそびがちよ(同 梅の文) 十三

紫上手ノ所此りせよのまばゆくやと聞え給へ同帝木十かいひきたるつまおとかど
かきよのあらねどまばゆき心ちをん侍り同廿二若ばりまりなるまよま
こまばゆくえんよこのまよきことゆめよつりぬ所ある同三三さよても我が
このつらひまばゆくして同桐壺二上ざちめうへ人をぞもあいかく目をそバめ
つゝいとまばゆき人の御覺えあり同帝木四十夢のやうよてをぎよかけきま
たやくいへんと思ひまどれて猶さてまちつけ聞えさせん事のまばゆけれ同四
三女身の有さまをおもふよいとつきかくまばゆき心ちしてめでさき御もてあし
何とも覺えぬ同柏木廿何でろもあきをいと心ぐるうまをゆきまざかりやと
覺れ同梅か枝十こよとこそ書給めとゆる聞え給へ同此數にのまをゆく
やと聞え給へ同仲文集廿「おもひさやりけてもかくゆふどをきよふの日影
よまをゆりらんと定頼集「ゆふづくよまをゆき程も過ぬるを待人さへやいでが
てよぞる万代戀一増基法師「つれかくておさふる袖の紅よまばゆきまてよ成よなるか
か源藤袴十三さぶすくよりよきこえなよまふよまをゆくてよろづおこめより
落くち一かの少將きよてまばゆくいりよ女君のおぞをらん云々枕九中々ひる
よりのれせうよ見えてまばゆけれどねんとて同九十日のうらもあつく車よさよ

りたるもまをゆけれ狹一下あままばゆのいろこのまよとて
まに六帖一「誰里も閨のまにあやめぐさけふひきりけぬ人のあらトを
元輔集五「子日する君がちとせの春とよ若菜のつまん千代のまよ躬恒
集廿「秋ぎりのまよまよとわたせば山のよきおりのけり家持集
十八「神を月時雨よあへるもまよのふりばちりかんりせのまよ同廿
「冬のたのさむきまよわきもこが衣をりりの聲をきり兼輔集十古別
君がゆ古「おもひやるまよのちらやまらねども雪のまよあといたづねん清正集廿
「百敷よまなのいろく句ひつ千とせの秋のきみがまに貫之集下五六
帖「山彦のこゑのまよさづねぬるいふことむあき空を行つれん順集四十
「いろふりくまよさけるまあさき沼よをられざりけり後秋下よ
す「山りせのふきのまにもみぢをこのもりのもよちりぬべらかり大和物
一六帖一下「川ぎりの中にきまよものからバるまようれうらま
土佐日記上かくて漕ゆくまよ海のちとりよとまれる人も遠くかりぬ舟の人
もとえをかりぬ同下舟をこぐまよ山も行とよゆるをみて同上かくあるを
みつこぎ行まよ山も海もまなくれよふけてよひんがも見え万二十一

梓弓ひりば隨意（拾）賀伊衡「御をぎして思ふ事をぞいのりつる八百万代

の神のまよ（六帖）四（古）離別幽仙法師「わかれをばやまのさくららまうせてんども

んとめどのまよ（六帖）四（古）旅菅原朝臣「此たびぬさもとりあへぎ手向

山もまよの錦かみのまよ（大和物）二「山ざとよわれをどめてよかれちの

ゆきのまよ（蜻蛉日記）下「すまよの岸よおふとのちりにけ

りつまんつまのまよ（古事記）上（十）隨（金葉）戀下（よみ）「あゝ引の山

のまよ（九）たふれさるからさひひとりふせるかりけり（月清）下「鹿のたつ森の木

ら夕のからまよ（吹）く風の神のまよ（万）卅七（長哥）かもかくも君らまよ（等）

○ありのまよ（後拾）旅和泉式部「ことゝのありのまよ（都鳥）とやこの事をわ

れよきりせよ

○あがれのまよ（神代紀）三十（順流）放棄（ナ）

○まよ（神代紀）上（四）隨（潮水）浮到（山）

補（小右記）寛和元年四月廿八日壬寅早朝羅出寅時降誕女子不逢産

間雖馳向産已遂了（合）

まよ。宣長云俗言ニロクニトイフニアタレリ（源）早旅（七）「なてるやまよの水う

みこぐ舟のまよ（ならね）どもあひみしものを（同）夕顔（五）かたはかるをまよ（め）のとや

うのおもふべき人のあさましうまよ（もみ）あまものを（同）繪合（十）草の手よかんか

の所々にりきませてまほのく（日記）のあら（同）帯木（七）のたちなどいとま

ほにも侍らざり（同）寄生（六十）あをまよ（木）丁さ（い）で、参れり云々（つ）ま

しくてあん（とま）まよ（い）出ま（同）若紫（廿）ささ（り）い（い）な（か）なり（け）ま（ま）ほ

からねども（とま）まよ（い）お（ひ）やる（も）を（り）（同）少女（廿）子か（が）ら（も）ま（づ）り（ら）ま（お）

りするひと（ま）ま（か）れ（ば）ま（は）ら（ま）ぞ（み）え（奉）り（給）ふ（同）四十（の）り（ま）か（ど）見（奉）る（ま）

もか（さ）ち（の）ま（よ）あ（ら）ま（お）い（ま）い（る）り（か）ら（る）人（を）も（人）の（お）も（ひ）ま（て）給（い）さ

りけり（あ）ま（同）總角（五十）女（ぎ）ま（の）御（か）た（ち）の（ま）ま（よ）う（つ）く（ら）ま（て）夫（廿五）「ま

のく（ま）の（あ）ま（ら）の（う）ら（ま）ゆ（く）舟（の）ま（ほ）に（も）人（を）あ（ひ）ま（て）が（か）源（初音）一（瀧）の（よ）

どみ（ま）づ（り）ら（る）御（り）ま（ら）め（ま）ど（を）いと（ほ）と（覺）せ（ま）ま（よ）も（む）り（ひ）給（い）ま（せ）

（宇治拾）廿四我（ま）具（せ）ん（と）い（ふ）ち（り）で（と）た（て）よ（と）い（ひ）け（れ）ば（ま）ま（よ）い（ま）て（ま）少（し）

い（ま）て（ま）ま（よ）い（け）れ（ば）源（橋）姫（廿）の（ら）あ（り）一（月）影（の）ま（お）と（り）せ（ま）ま（よ）ま（よ）ら（ん）や

い（枕）七（齊）信（詞）あ（ど）り丸を（ま）ま（よ）ま（ち）りくい（か）た（ら）ひ（給）ぬ（さ）す（ま）ま（よ）く（ま）思

ひ（た）る（ま）ま（よ）い（あ）ら（ま）と（あ）り（た）る（を）いと（あ）や（く）かん（千）載（戀）三（安）「そ（な）れ（木）の

そかれくしてむき苔のまはあらせどもあひきてーがが(源若菜)下ノこまのあをちの
まーきのそーさーさる志とねまそよもあそびをうちおきて(新千)戀二法「
らせをやまそよけつゝ行舟のいかたよのまかよふ心を(同)同明「大舟のまそ
手かその風せいさみ引りさーなき人よこひつゝ。これら真の船の帆をいへり

まがろー(宇治拾)八釵の護法をまゐらせんおのづから御夢よまがろーよも御ら

んせばさとのあらせたまへ(金葉)雜下依他の八のさとひを人々よとけるよまの身

如幻といへる事をよめる「いつをいつとおもひさゆみてかゆるふのりけろふそと

のよをすそらん(同)雜上「年久しく修行ありきてくまのにてけんくらべーけるを

祐家卿参り逢てとる事の外よやせおとろへて姿もあやけよやつれさりけれ

ば見忘れて傍なる僧よいりなる人ぞことの外よーありけかる人うなゝと申は

るをきゝてつりいゝる僧正行尊「心こそよをばせてーりまがろーのすがさも人よ

忘れにけり(源幻)「大空をかよふまがろー夢よととえこぬ玉の行へとづねよ

(増韻)幻妖術也即今吞刀吐火植爪種木之術皆是云々(源桐壺)七「たづね行まがろ

ーもがかつてよても玉のありりをそことするべく(拾)雜上「沖つーま雲るのきー

をゆきりへりふそりよいさんまがろーもがが(土御門院御集)楊貴妃歸唐帝思「まが

ろーをうつゝさりよまがさめてまがさめやらぬ夢のりよひぢ(千載)戀五「お

もひあまりうちぬるよひのまがろーもかまぢを分てゆきかよひり(隆信集)「か

なーさをたゞよそながらとふよりいこれまがろーよあらまー物を(同)「あかーさ

いたゞとふどよまかーこきをまがろーまでも思ひける哉(相摸集)「うつゝともゆ

めともこり身にそへるかの幻とさらばたのまん(万代)戀三「いとふべきを

まがろーの世中よあ浅まーの戀のいさひや(玉葉)雜五「まがろーい玉のうてあ

またづねきて昔の秋のちぎりをぞまく(新拾)雜中「うきも夢うらぬもま

まがろーの世をかさむる我もそりな

まがろーのよ(狹)三下宮いとまがろーの世をそむきまてさせ給へるのみうれ

く覺されて御こゝろのうちい(万代)雜五和「草の上の露とたとへぬ時どよ

もこのまのまれーまほろーの世(隆信集)「たづねればためーやいあきまがろー

のよをへどてさるあまのうへま

補まがろ(土佐日記)わかれいさよて手をさるゝつんたる菜をおやまがろら

ん。守部云マボルトハムサボルト約メタル詞ニテコ、ハ食フヲ云サレバ次句ニハ

クラブラベトカヘテウタヘリ宇治拾遺ニマウボルト云ルモ此マボルトノ音便也又約

メテハモルトモボルトモ云

補 まほら (万) 十八 云々すめるぎの神のみまどのきこしをを國のまほら山を

もさまおほほと (同) 九 九ノいふりき國之眞保良乎つをらりまめいまへ

まへ 前 (伊勢物) 七段 八十りへりくる道とほくせうせう宮内卿もちよが家のまへく

るよ日くれぬ (後) 春兼輔朝臣のねやのまへ紅梅をうゑて (空穂 國讓) 上四昔の人

々集りてなくさまこ君の御めのと前あるを見給ひても中納言いとくかきたまふ

(源 東や) 八此わたりに時々出いりいそときけと前よいよび出ぬ人の (伊勢物) 四

又のとりのむつきまへの梅のさりりあるよ (大和物) 四 ひとりいていりよりせ

まへとびつればそよともまへの萩ぞあふる

まへいさ (つれ) 百十ありきの御まへ板までありければ。車の軾をいふ

まへちりく (枕) 八 受領ニナ車やどり車引さて前近く木多くして牛つがせて

。(狹) 二 上。女ニ所前ちりく人二三人バありきてものいふそき給ふよ (源 手

習) 六 前ちりき女郎花をりて (狹) 二 上障子より通りて云々 見給へ前ちりく人

二三人をりりよてものいふをきまふよ

まへとたり (源 葵) 七 さをがよつらきひとの御まへとりのまたるよ心よわや

(六帖) 一 上 一いにいりよーものを久かこの月の光のまへとさりする (源 桐

壺) 五 ひまかき御まへとたりよ (伊勢集) 七 あるてたちのつがねのまへわたりなる

よ (蜻蛉日記) 二 文に 身をいかへねばとぞ云めれと前とさりせさせ給ぬ世界

もやあるとてけふかんおれもあやしきとんせがさりよあそをりよけれとて (源

夕顔) 八 八ふもあの一とみの前わさり給ふ (枕) 二 十四 ちとあそをる所のまへと

りさる (榮 初花) 七 七つがねくよまらづる女房たちと殿西のたいのそのおおんで

んかどわたりてうへの御かたの御讀經宮の御方の御讀經かどのまへわたりるほ

ども

まへつきみ 宮人。御前の (景行紀) 朝霜のまへのさをい 魔弊菟者瀾 云々

まへあるひと (枕) 八 心もとかきもの、おられとおもふ人のあるよ前なる人よ教

てものいせさる (同) 十二 後朝文 かきさて前ある人よもとらせわざとどち

て小舎人童のつれくよきを身ちりくよびよせて打さめきて

まへのこと 前の (源 蜻蛉) 卅 宮のうへも誦經一給ひ七僧のまへの事もせさせ給けり

。花鳥、僧食ノナリ

まへのさつき 前の (蜻蛉日記) 中。閏アル年 その前のさつきの廿余日のほど

まへのもの

前の(宇治拾)五

まへのものうゝかひ給ふといえからひ給ひせかりぬ

まへまうゝ

前申(源竹川)二

此前申もあまりたひふれよくいとやうと思ひて。

注御前ニテトリ申心ナリ

補 まへでー

(著聞)廿

袴のまへでーをとらんとしけるを

まへゆるさる

(榮 初花)雜下

まへゆるさるひまわりして侍りける女の前ゆるされて後 云々(後)

春ある人のもとよゝひまわりの女の侍りけるが月日久くへてむ月のついでち比

ま前ゆるされたりけるま雨のふるまてよみ入らす「白雲のうへるけふぞそ

るさめのふるよりひある身といりぬる(枕)九いとあへかきまで御まへゆるされ

とるいおほしめせやうこそあらめおもふまごふいよくきものぞと 云々

まへーりへ

前後(源若菜)下

まへーりへの心こまどりにかたわきて

○御まへさらせ

(空穂 嵯峨院)四十

おとゞの御前そらせ召つりひ給ふおほやと

まつはてもおもやうせまへたり(源 桐壺)四あるときのおほとのもよりすぐ

てやがてさふらひせ給ひをさあがちよおまへさらせもてあさせ給ひしぞよ

まど

(憲(新古)釋教)

「ふるさよのまどうつ雨よ音せぬはうきよとのきのーのおあり

けり

まど 的(和泉式部續集)まつりの日あるさんさちのまどのかたを車のわよつくりと

るを見て「とをつらの馬からねともきとがのる車もまともとゆるかりけり

まどろむ(和泉式部集)上

「まどろめばうきよ夢ともとるべきよいづらひさらよね

られざりたり(源 桐壺)十

夜のおとゞよいらせ給ひてもまどろませとまふ事かこ

(同 橋姫)卅

五

うちもまどろませ(千載)雜中よみ「うきことまどろむほどのす

れてさむれはゆめのこゝちこそすれ(源 空蟬)七かき人のまどろむをくいとよ

くまどろみたるべ(後)戀四よみ「まどろまぬものからうとてかすがようつ

にもあらぬこゝちのこをる(和泉式部集)下「まどろめばふきおどろか風

の音よいとゞよさむいかるをいぞおもふ(源 若紫)云々まておもほしめぐらす事おろく

てまどろまれ給ひせ(同 桐壺)八つゆまどろまれせあかかねさせたまふ(補)万代

(玉葉)

旅孝 標女

「まどろまどこよひからでいつり見ん黒戸の濱の秋のよの月(續拾)

戀三 定頼

「心よあらぬ旅ねのまどろむにのこ夢を人よかたるか(續千)釋教法印

「晴やらぬ心のやみの深さよにまどろまで見るゆめぞかあき(万代)冬和泉 式部

「まどろむをおこはともかき埋火を見つはかかくあかところか(隆信集)「一九び

の袖ぬらいつるをぎのまどろめばま風わたるかり(新古)秋下 宮内卿 「まどろま

でかがめよとてのをささるを麻のささるも月うつ聲(古)戀三「ねぬるよの夢を
とかかまをささるめいやはとかかまよかりまさるかか(源 若紫)十まどろまれ給ひを
(同 須磨)四十よもそがらまどろませ五

まどろまをいり(狹)四中例よりもまどろみ入侍りまなるも

まどろる(元真集)廿「秋ぎりのそれぬ思ひままをいれてかりの羽風まおどろくを

かか(源 若紫)四十きみめをまどろいれてふ給へるを

まどろいか(空穂 俊蔭)二六どろころでまどろいかつるも我罪まあらむ(空

穂國讓)一五心たまひをまどろかせ給ふ物りか

まどろい(纏也)空穂樓の上下十九若君の此とのをさしてどてむつまうまとい

奉り給ひ(源 紅葉賀)六いとよき心さまかちよて何心もなくむつれまどろい聞え

給ふ(同 紅梅)四此わりぎみを内よてかどまつけ給ふ時めまどろいたふれが

たきに給ふ

まどろい(源 夕顔)五十をさなき人まどろいとりと中將のうれへい(同 總角)九十

夜ひとよ雪まどろいされてぞおほいまける(同 稚本)廿「朝ぎりまともまどろ

せるうりの音を大かたよやの哀とぞきく(後)秋下「聲さて、鳴ぞいぬべき秋ぎり

友則

まどろまといせる鹿よのあらねど(源 帯木)二十人のころをまどろい(同 空蟬)八あ

えりまのおもひまどろい(寛平歌合)「松の上よか、れる雪のよをまどろいて時まど

いせる花とこそ見れ

まどろい(源 紅梅)一いといけうおもほいまとをなめりいを

まどろい(空穂 國讓)下、まろりよけつるぞやとてこれりつくいとやうゑいま

どにるあみ給へり

まどろい(源 夕顔)二壁の中のきりとりままどろいよからひ給へる御耳ま

(和泉式部續集)時々くる人をこいまどろなるころ花をるを其人のいそくどつ人の

もとよやるとて

まどろい(貫之集)「久方の月のまどろいま成ころの紅葉をむともいれざらん

まどろい(四十二物争)上陽人が恨と王照君がかかひひと「ななき行道の草は

の露よりもまどろい雨やをぬららん(和泉式部集)「よもそがら何こどをりい

おもひつるまどろい雨の音をまよつゝ

まどろい(伊勢集)七(後)「海とのまどろいの中いかりぬめりまかからあらぬ君が

みゆれば(古)雑三「思ふまどろいせるよいからよきま、まくをいき物ま

人しらす

を後

影の後

ぞ有る(賴政集)上「まどゐていさるの水をむすぶよの手をどよぞいる弓をりの月。まどゐる射ヲ兼但カナ達(順集)かゝるまどゐるよさふらふあどさへまゆはれど(源若菜)下殿上のり弓云々此院よかゝるまどゐるあるべしとさつとへて。的射歟(夫)卅四慈鎮「我ねがひえちてうれしさまとありなれたれものぞそのりなむしろよ補(万代)冬通方「柳葉よとどりをそへてさ、竹の大宮びとぞまどゐるせりける(中務集)「おもふとちまどゐて見れば梅花あゝろようやふりく見ゆらん(空穂吹上)下ノ「春をがらとくくれつ、万代をきとまどゐる物もおもひト(伊勢集)「まどゐるする身よちりかゝるもえちばの風のかづくるよさかりけり(拾)神「柳葉の香をかぐととめくれれば八十氏人ぞまどゐるをりける(源玉葛)四十とさどある哥よみの中よていまどゐるをかれぬ見もトぞか(月詣)上十月はりり雪ふりりゆるよ人々あまさまとゐてあそびありしてとべりけるところへつぎのとこのる花の盛よ申つりけり右大臣家備前「あづさ弓をるの花よぞ思ひいづるおもろりりゆきのまどゐる(永久四年百首)賭射「をるたてばあづさのまゆみ引つれてとりきのうちまどゐるをぞする。右の二首の圓居の射を兼たりともは假字たがへり

まどのはさる窓(源少女)十まどのはたるをむつび枝の雪をなら給補(新千)

雜上「君が世よ心のやそのそれ行やまどのをさるのひりなるらん光善

まどのうち(源常夏)五まどのうちあるをどのほどよたがひてゆりくおやゆべりめることかれバ(同 帚木)五おひささおもれるまどのうちあるをどの(同 若菜)上

七おもひやるかたかさまどのうちよ(長恨哥)養在深窓

まどふ(万)二卅六とねりのまどふ(古)離別よみ「一ひて行人をとめんさくら花いづれぞちとまどふまでちれ(後)戀五よみ「常よりもまどふくぞりへりつるあふちちをかきやどよきつ(源夕顔)十そこそりとかくまどをいつ

補まどふ(拾玉)四「身よまどふ秋の夕霧とくそれよされてまつべきわが御法うまどころ(蜻蛉日記)中益まどまの事年頃まどころまものつるもをかれやぬらんとあわれかる人もあしくおやをらんか(源夕霧)七十もつとめさりけるけい

かどうちつけよまゐりてまどころなどいふ方よさふらひていとなまなり

まど(貧)つれく(卅九)財おほければ身を守るよまど

まど(感)續紀廿六感宇治拾十四まどひとりて舟さしはあちていよければ云々

まこと甘貫といひければそれよまどひりのんといひけり(源手習)四十まどひ

てきてみるよわが御上の衣ねさなどをことさらバウリとてきせ奉りて(枕)五、かう
 ふりえておりんことちりくからんたは命よりのまさりてをしるべきことをその
 御さまそりかど申てまどひけるこそ口をしけれ(源柏木)十よの中をうへりみま
 どうおもひ侍りしと猶まどひさめがたきもの此道のやみよかんはべりけれバ
 (伊勢物)百十むろい男をむろよみちのくよまてまどひいよなり(源蜻蛉)四ひと
 こを見つけてさわがるれとおもひけれバまどひいる(狭)四、上いりある事と聞給ひ
 てのく夜中にまどひわさり給へるからんと覺をよ(古事記)上、惑云麻刀比(源桐壺)
 九車よりおちぬべうまどひ給へバ(同夕顔)卅身もあつきこちいていとくるしく
 まどひれ給へバ(伊勢物)初こ、ろまどひよなり(源夢の浮橋)七、観音の給へると悦
 びおもひて此人いさづらよあしたてまつらトとまどひいられて(同夕顔)十まどひ
 ありきつゝ、おのびておまよさせをめてけり
 まどひいく(伊勢物)九段みちいれる人もかくてまどひいきけり
 まどひき(伊勢物)百七みのもりさもどりあへてしとよぬれてまどひきよなり
 まち(町)源(寄生)上の町(同少女)五十、六條京極わたりは中宮のふるきみやのほとり
 を四まちと一めてつくらせ給ふ(同)五十、未申のまちの雪をさるし給ふ(同)藤下

○補 まちくたり (拾玉) 四「町くざりよろずひ行てよと見ればものゝことわりを
 いられけり

○補 まちあし (拾玉) 四「よなひものさうきのいれお町足駄よと行道の物とこそ
 みれ

まちいで (源 帚木) 四十さるべきかたのついでまちいで (同 若菜) 下、もし思ふや
 うあらん世中とまちいでたらば

まちどろ (枕) 二、外よあまのつれありくやとよまちどほよひさしきを(源 寄生) 卅九
 ひきよきてもわたり給をせかどしてまち遠なる折々あるを(同 松風) 十、斧の柄さへ

あらしめ給はんやとやまちどろよと心ゆかぬ御けしきあり(後) 兼輔 (大和物) 「宿
 ちりくうつしてうゑるかひもなくまち遠よのみよはふ花かな(補) 貫之集「さちぬ
 との春をきとど山里のまちどろよこそ花のさきけれ

まちどろ (源 紅葉賀) まちとりたる樂のよぎのしきよ(同 處女) 廿、風の音の竹よま
 ちどられてうちをよめくよ(同 帚木) 六、中將まちとりてこのしかどをわきまへさ

ため給ふ(補) 源 梅かえ 十、御しとねまるりそへさせ給てやがてまちどろいれ奉り給
 (同行幸) 十、かうくちをしきよごりのをゑよまちとりふりくむむべき水こそいでき

がたりべい世をめれ(拾玉)七「夕立の雲よりいづる夏の日を待とる物の蟬のもろ
おる(源 初音)九まどあはれ卒の、そとよわさり給ひぬ云々まちとり給へるをさあま
けやけーとおやれべりめる

補 まちどき (後拾) 兼盛 「花みると家ちよおそくりへるりなまちどきすぐと妹やい
ふらん

まちりね(万)十七 「さぐかまのーがのからさきさきくあれど大宮人の舟麻知兼津

(同) 三十八 「わがせまが古家の里のあすりまの千どりかくかり君まちりねて(補) (万)

卅一 「待ちねてうちへいらす白たへのわがころもまつゆのおきぬとも(万代)

夏房 「まちりねて尋ぬるやどの郭公有明の月のかたよかくかり(山家) 「まちりね

てねたらばいりよううらまゝ山時鳥夜をのこーける

まちりけ(源 薄雲) 二十 あすりへりこんとくちすさびて出給ふまわさとの、口ままち

りけて中將の君してきこえ給ふ

まちりき(伊勢集) 廿四 「翅をかき鳥とあらればとびさらせまぢかきえよもすまんどぞ

おもふ(古) 戀一、よみ 人しふす 「人しれぬおもひやなぞとあーがきのまちりねれともあふよ

しれかき(後) 戀六、よみ 人しふす 「こえぬてふ名をかうらみをすぶりやまいとまぢりくか

らんとおもへば(同) 同 「まぢりくつてつらきをみるのうけれともうきものりの戀

しきよりの(補) (新拾) 秋下 「へどつとの見えてまぢりく聞ゆなり霧のうへゆく初り

りのこゑ(同) 雜中 花園院 「かたのがた波路それ行夕かぎよ入日まぢかき淡路ま山

(同) 同法皇 御製 「よるの雨の雲吹さらふ朝あらし晴てまぢりき遠の山のを

まちよろこび(源 少女) 廿七 宮例いひいらせうち忍みてまちよろこび給ふ(同) 四十

后まちよろこびて御たいめんあり

まちよわる(新續古) 戀三 雅世 「よなくをかさねてぞ猶られぬるまちよわる身も心

づよさゆ

まちつけて(枕) 六、んざもとむるよからうとてまちつけて(宇治拾) 十四 けふをま

ちつけてこの人をかくせめければ(源 帚木) 四十 さてまちつけてきこえさせんこと

のまばゆければ

まちうけ(源 蓬生) 初 まちうけ給ふ御たもとのせはきよの(同 野分) 六 宮いとうれ

くたのもしとまちうけ給ひて(同 柏木) 四 おとまのこき行ひ人がづらき山より

さうと出たる待う給ひて加持まらせんと給ふ

まちおもふ(源 寄生) 廿七 宮の云々 色めりしき御こゝろのいりめでたきまままち

おもひれんとおろけさうして

まちくらせ(源 帚木)四十きのふまちくらしを猶あひおもふまどきあめりとるん

ト給へバ

まちく(堀次)待人戀「ひねもそよくれまちくしてくれぬればよもすがら又人を

こそまて

補 まちけり(古)春上よみ「あざかりと名よこそさてれさくら花年よまれかる人も

まちけり。廣足云此まちけりもまちえけりよてまちつけさる事也まち見し同一

まちさいそひ(續古事談)。隨身の實政さまでもなきまちさいはひのおかトやうか

かといへり

まちされ(万)廿五君がためかましまち酒やその野の云々(古事記)中五釀待酒以献

まちさ(源 胡蝶)廿四父おとゞあどのたづねりたまふよてもまめくしき御ま

ろせへよもあらざらん物あらまいていとあまつらうまちさゝ覺さんことゝ

まちと(源 若菜)下九まさいとゞ此御姿もまぐるしくまちみ給んをとおもひそべ

れど

補 まち見し(草庵集)「今ぞするまち見し頃のよかしくもまさいのかさる心なりけ

り。玉箒云まち見しと待得て逢見たる事也續集三年不「かはざりの玉づさをど

ままちも見せ云々まちも見せの待えて見ぬ也と諺解よもいへり又長歌よ「天飛雁

の玉づさをおもひの外ままち見つ云々是も待えて見さるせいへり(玉葉)戀二。別戀。

伏見院「うれし死ようさいをひけるからひりかまち見し宵よ今の別路此外も猶お

新宰相

ほし(補)まちし(待えた)散木「秋のよの鳥のそつねつれもかき人まちしよのこゝちこ

そそれ。下ノまち見しの處引合すべし

まちまぐ(源 桐つほ)二十布どへばすこしうちまざるゝこともやとまちすぐす月日

まそへていと一のびがささいわりあきわざよかん

まり(拾玉)廿七「花のえよりけて數そふまりの庭のかづまぬ布と雨をゝぐかり

まぬる(宇治拾)廿九きのふおのれがおもひの石をふみかへし給ひしまたすけられ

て石の苔のまぬりれてうれしとおもひ給しり(源 松風)十七ころのゆくりぎりも

ておせば後の覺も罪まぬりれかんり

まる(宇治拾)三、四條の北ある小路よまどをまる(万)十六「あらさちとむばらり

そけくらたてんくそとなくまれくしつくとト(古事記)上屎麻理ちらしき(竹取)

十つをくらめのまりおれるふるぐそをよぎりさまへるかりけり
補 まをどと (著聞) 十七 まをどとて會合したる所かどさまくあきてえもいと
きいろどりて云々

補 まをのよひいと (新續古) 秋上 「さかたたまをのよひいと引りけてくること絶
ぬ星合の空

補 まをす 申(万) 十三 「たらちねの母がよぶ名をまをさめと路行人をたれとてりて
り。万葉多し古事記傳 廿二

まりは (源 紅葉賀) 廿二 みるへりたるまをいたうみのべたれどまりのいさくろみ
おちいりて

まがり (空穂 國讓) 上 酒をむま入てすゑてまがりしてわりつゝのます (同 同) 中
卅をこよの白りねのまがり二十をりり

まのり (拾) 秋 とつせへまうぞをべりける道まさは山のもとまよりやどりて (同)
大井川よ人々まよりて歌よみまべりぬる (同) 東山よもみぢ見まよりりて又の日

つとめてまよりりへるとよまをべりける (枕) 三 さまこの道まよりりいりに
なれば (竹取) 八 ちやき風ふき世界くらがりて舟をふきもてありくいづれの方とも

しらぎ舟を海中あまりりいれぬべく (古) 別 きの宗貞が東へまよりりける時に **補** (詞

花) 下 秋の野を過まよりりける (後拾) 一 男のもとよりけまひのあはりたるいり
ま今へまよりるまどきりといひおこせて侍ければ (同) 三 伊勢の齋宮わさりよりま

りのほりて侍りける人 (枕) 十三 后宮の御前出給ふ時の あかまよりりてろく
の事もの侍らんとてさへ給ひぬるのち (宇治拾) 四 ちりまたちてあゆま

り (新後撰) 冬前大納言爲氏まよりるべきよ申て侍けるあろ雪の朝は申つり
ける 平親世 (源 玉葛) 十六 いづちもくまよりりうせかんよとがあるま (金葉) 上

實卿の許まよりりたりける侍らざりければ (仲文集) 物 へいきれるよ女よいま秋
の必せ罷り登りかんぎといへりければ (万) 廿 「まのいづよまをひくしてけふの日

やいでまよりらんみるまをなくに (源 藤の末葉) 九 おきかいたくゑひすみてむら
いかれまよりり入ぬといひすて入給ひぬ (万) 三十五 「わがせこがれまよりらば

しろさへの袖をふらさね見つゝぬはむ (同) 六 長哥あまざりるひかべまより
り (伊勢物) 百廿 一段 むり男梅つゆより雨まぬれて人のまかりいづるを見て (千載) 云

熊野のかたよりまよりり入けるよつけて (空穂 俊蔭) 二 四たりき山ふりき谷をおりの
ずりまかりありきてあしたまかりいでくらくまよりりへる程たよろめ

うりかしく侍れば(万)十八。長哥云々事をそりかへりまかりて云々。是ハ久米廣
繩朝臣の越中より都へのりて再下りきたられざる時越中守大伴家持卿の越中
て待つてよまれざるなりまかり越中より下りきたられたるをいへり○罷古事記
傳七ノ委ク云り佐喜草古今集の歌の詞書は但馬國のゆへまかりける時とあるハ
帝へ申詞かるゆゑまかりといへるかれハ物ハ書あるハおくまのちのとのとこ
ろへゆきける時とよりくべきなりざるをゆくといせんよりのまかりといふたも
のりりめきさるとよのて今の歌人のいづもさまかりとぞのくなる此たぐひの
ひがことま、おほきざり撰集の歌の詞書に見にまうで來けるりへりまうできて
申ける物ハ記しおくまの見に來りたるかへり來て申けると書べきかりまうで敬
ひ詞也和訓葉まらづの條退とよむハ罷出の義かり同書まうづ催馬樂ハ見ゆ神代紀
ハ向又詣をよめり參出の義也俗ハ神佛の御前よのといへど古今集躬恒がまうで來
たるよと見えさり神代紀ハ上來をまうできたりと訓せり朝參の義也罷ハ間離季鷹
ハ目離也と云り晷中秋の紀行などに物せんハあそり山よゆきける又あそびておど
あるかたおたしるべハ万葉三山上憶良罷宴歌「おくらハ今者將罷子將哭其彼
母毛吾乎將待曾。是ハ退出ニ云ル也

まらりまうす(源朝顔)十さむがまらり申さたきこえ給ふ(同薄雲)十まかり申し

給ふさまくまあき夕日はいとゞくきよら見え給ふを(新千)離藏人これすけ

らら物の使まつくへ行まらり申さんどて御物いみよこもれるをあねんと云々

まかる(古事記)上或有邪心者云々麻賀禮云而

○まかづ(源夕顔)六をかたちあがらまらづれば

○まかんづる(源紅梅)十つとめてこの君のまかんづるよ

補まかよふ(山家)上「ませかくハ何をしるハおものまし月もまらよふハ菊の

そあ

まがね(和泉式部續集)「へどて、いいとゞうとくぞ成ぬべきまがねふくかりきび

の中山(古)大歌まがねふくきびの中山(堀後)夏衣「時といへばまがねもどくる

夏なれやなほちぢれりせそのとどろも(夫)十八「雪ふりまきびの中山あとたえ

てけふのまがねをふきやわづらふ

まらかひ(源初音)四御まらりとりまらかひか、せ奉らせ給ふ(枕)六御くハあや參

りて藏人どもまかかひの髪あやてまるらざるほどよ(同)九上藤御まらかひ給ひ

けるま、まらりくさふらふ(狹)十三いりまこうと給ひぬらんと御てづらまらか

ひそゑてそゝのり給へど(源 手習)四十とくきこめせあどよりきていへどまり
 あひもこゝろつきあくうとて見らぬこゝちして(とりかへせや)八中納言御物ま
 ゐらする御酒まりをひよ中つりさのめのとさふらひて(源 手習)廿八又の日りへり給
 ふよも過がさくあんとておのりたりさるべき心づりひちたりければむかへおもひ
 出たる御まりをひの少將の尼かとも袖口さまことおれどもをり(空穂 藏開)中、四
 十一
 大將一のよきくごものりらものなどをしきよくして御めづけ御みきなど参るまり
 かひよ二云々右近といふかんいできてつりうまつりける(同 同)中、大將いりてか
 卅六
 御文なくていとて御硯紙あどりまりをひ奉り給へ(同 祭使)四十。兵衛詞かこ
 三
 らぬものいさぞそゆるかり一夜のまりをひよさふらひりかかん(同 吹上)下、八
 十八其
 日の御まうけ種まつがめつりうまつり給ふ云々御前の物みを女のつりうまつり給
 ふなればまりをひよりそとめて女のつかうまつる(同 初秋)上、廿其まひの日云そ
 九
 の日あゝこの御まりをひよ仁壽殿の女御ひるのまかをひよ承香殿の女御よさ
 りの御まりをひよ式部卿の女御(同 國讓)下、二右近やむかへ覺えてまりをひせむ
 廿二
 やゆづけせよあさの給へ(同 樓の上)上、十九帥の君火くらりめり御まりをひせられ
 十九
 よ(源 夕顔)廿御かゆをといそぎまるらせされど入りつぐ御まりをひうちあひせ
 三

(同 柏木)四御硯をせりまかなひてせめきこゆれば。注トリツクロフサイフ(同
 若菜)上、七御加持にて、まりでぬる御くご物あどちりくまりあひあこれさり
 十四
 りをどよといと心ぐる一はよおもひて聞え給ふ(同 浮舟)廿例のやうなれどもまり
 一
 かひめざましう覺されて(枕)五とりおろしまりをひささごやどよ
 廿五
 まぐく(源 須磨)卅おそる御有さまかたる帥よりそとめむりへの人々まぐ
 八
 まぐしうなきとちたり(同 幻)九例のかとごくと給へればいともの一と覺して母の
 九
 の給ひし事をまぐくしうの給ふとてふしめよかりて御ぞの袖を引まさぐりかど
 一つゝ。注イマシキナリ(枕)一、粥杖いかかる心よりあらん泣をらちちうち
 四、ノ所
 つる人をのろひまぐくくいふもをり(蜻蛉日記)一家よきてもあさかくまが
 一
 まぐしうとがむるまでいそとらりる(枕)二、よくきもの、中、犬のもろ聲よまぐ
 九
 かがとあきあけたるまぐくくよく(空穂 國讓)中、四いつかうある事よかあら
 廿四
 ん宮のしるしめしてやもしことやうなるわざしたるり大將詞いとまぐくしき事
 大將詞
 いかゞのあろしめさらん(同 藏開)中、九大將ノ参あり手をすりてさちるをが
 卅九、内ノ折
 むあるのよろづのまぐくしきまといそぬあ(榮 根合)四かまあてとるこゝち
 四
 いとらうてつゝもあへまぐくしとてさいあむ(空穂 樓の上)下、五兒君ノい
 十六、七

とまぐくくしき事の給のそかくの給のせば更し二三年もわたし奉らト(落くる)四
あままぐくくしきあまよりありたまふべき(狹)十九下たぐへ給ふあと日よ千九
びいひおますればあままぐくくし世よさへ侍らトその曉し御車を給へ(同)廿あ
りきもこりよりくバ土いまでもありかんまいてそのしらぬ人のもどよのいりか
との給へバあままぐくくしやさなる人よ土いまぬや侍る(源總角)廿おそろし
き神ぞつき奉りつらんと云々あままぐくくしおその物りつりせ給はん(同若菜)下
八殿の内おきのしるけはひいとまぐくくし(同榎柱)廿いよくしらざちてまぐ
まがしきことなどをいひちらし給ふ(宇治拾)十五おのれのまぐくくしけし心もち
さるものかな心をのかたるといおのれがやうなる物をいふぞか(古事談)六心
憂目ヲ見ムズルハ此宮今一兩年ノ内ノ人ナリト云北方被仰云マガくくしク争如此
被申哉

まぐくくしきすぢ(日本紀)二八禍ノ字チマガトヨミ延喜式第八廿悪事古語麻我許
登(万葉ニハ)枉言トカケリ是等ノ字ナルベシ(榮見はてぬ夢)廿猶いとあさましき
御心ちのさまを心得せ見奉らせ給へどまぐくくし筋よ誰も覺しけせ(源
藤袴)十いとまぐくくしきすぢよもおもひより給ひけるりかいたりふりき心あらひ

からんり

まかけ(源東屋)四十
いたちの侍らんやうあることちの侍れば云々うしろめさけ
まけしきをささる御まりたこそわづらひしけれとてわらひ給へる。(細)いたちと
いふ詞をうけてまりたといへり疑ひしき心をいへり。(花鳥)いたちの人を見て
あやしく思ひてまりけさきものなり(盛衰記)三五月十二日の午の刻はありく大き
かるいたちの云々御まへよまあり二三べん走りまひり大きよきらめきて法皇よむ
りひ参らせてをどり上りくまりけをどてうせよなり(同)廿高き峯にのりま
りけをさして見わさせバ(源手習)四十いさちとかいふかるものぐさるわざるひ
たひし手をあて、細流まりたをさしくるあり。(孟)尼公の手習の君をそしる体
あり馳のまりけさきといふことあり(長門本平家)八おもべどもまりたをさして見
るが

まがふ(源帚木)廿
をたるしやくとびまがひてせりしき布とかり(同柳)廿人々ちか
うまありてしけうまがへバ(躬恒集)廿「木のまより風よまがひてふるゆきも春く
といへバ花りとぞみる(兼輔集)九(新撰和哥集)「白雲の中よまがひて行のりも聲
はらくれぬ物よさりける(六帖)上「今日ありて明日過ぬらん神を月よぐれよまが

ふ紅葉りざゝん(万)五、十「妹が家も雪りもふるとみるまでよこゝたもまがふ梅の

となりも(源松風)廿「うきぐもよをまがひ一月かけのそみをつるよそのどけ

かるべき(續拾)資宣「ふりそつる木葉の後のゆふぐれまがふかたなくぬる、

袖りか(風雅)春下俊成女「高砂の松のみどりもまがふまでそのへれ風も花をちりける

(後拾)春上選子「春のまづ霞まがふやま里をたちよりてとふ人のかきりか(新

古)冬通具「木葉ちる時雨やまがふ我袖もろき涙の色と見るまで(源夕霧)廿よろこ

うかりぬるをのこのかくまがふかたなくひとつ所をまもらへて(新古)同具親「いま

のまたちらでもまがふ時雨をひとりふり行庭のまつ風(同)同具「草も木もふり

まがへたる雪もよよ春まつ梅の花の香ぞする(千載)春上「そまつせの花の盛を見

わたせば霞にまがふ峯のいら雪(同)雜上「そるよととおまへの沖を見わたせば雲

るよまがふあまの釣舟(万)廿五「あゝ引の山とひりるもみぢ葉のちりのまがひ

いとふよもあるりも(新古)戀一俊成「蟹のかるみるめをかみまがへつゝかくさの瀆

をさづねこびぬる(同)雜上七條院大納言「おもひあれば露のたもとよまがふりと秋のはト

めをされよといま(草庵集)「むら雲のまがひもてど山風の吹をうるべよゆく

いぐれりか。玉簾云此まがふ山風も吹まよふ事也時雨の雲のむらくと山風も

吹まよふと見ゆるがつひよの其風の吹たへうつりゆくけいさかり

まりぶら(和名)唐韻云暄和名萬奈加布良目暄也(宇治拾)十まりぶらくぞくまかの

あざやうりまたりく

まがでと(万)三、四「およづれの柱言とかもとりやまのいとるのうへにきみぐこや

せる。宣長云スベテ柱ハ狂ノ誤ニテタハコト、ヨムベシ

まかで(源桐壺)六まかでかんと給ふをいとま更よゆるさせ給ひぬ(同末摘)廿何

のくさひひもかくあひれはかるまりで、人々くふ(同桐壺)七わりあくおもろいお

がらまがてさせ給ひつ(同帚木)廿雪をうちむらひつゝまかで(同紅梅)十人々の

ちかうもまるらむまりでちりかどしてあめやりよかりぬれば(同夕顔)廿七曉も御む

りへよまるるべきよ申てかんなりで侍ぬると聞ゆ(源若紫)十。僧都此ころこ

づらふ事侍まよりかく京よまかでねわたのもし所よまもりてもの侍あり(同

帚木)十此およびをかめてまかでぬ(枕)十二、女房のまわりまりでまるとるよの車どか

るをりもあるよ(玉葉)春上「あそゆさひふりもやまかんなまよきよりまたるゝ花の

ちるとまがふよ(源葵)八、四十つとめて此まをまりでさせ給へるよぞ(同藤の末葉)

九まりでん空もそとくくおそ侍りぬべぬれ(同若菜)上、九こかさへまりでんや

とのたまひて。花ちる里の方より居給ひ夕霧其外の人々の源氏まゝを方へまかり出るかり(同 野分)六。夕霧三條の宮に侍りつるを云々わあきこのやうはおぢ給ふめればこゝろぐるしきままりで侍さんと申給へ(源氏詞)けしはやまうで給ね云。是らの今云罷出の意はて參るをいふなり(源釋)云まりで罷出の約れるかりすべて罷の參の反はて禁中を退出するよいふ詞なるを轉りていたゞ貴人の前を退くよもいひ又轉りての貴人と語るよ已が他へゆく事よもいへり(源 玉葛)卅まかてかぬりよすぎ侍りぬれど

補 まかておとこ(榮 日蔭の蔓)十まかで音聲やはがは「まへらぎのみよをまち

で、水はめるやその川なとのどねあるらゝ

まりでまゐる。退出すると參(源 玉葛)廿まりで參る車おほくまよふ

まがき(古)秋上「さとのあれて人のふりよゝやとなれや庭もまがきも秋のゝらか

る(源 少女)五十さくのみがき(同 玉葛)四兵部卿の宮をこの此まがきのうちま

しうし給ふ心みどりよゝがを(万代)雜三「まがきするひどのさくみがつ木お

とあかかゝがまゝかぞやよの中 惠秀

補 まがき(万)四五前垣とかけりこれ正字歟

補 まがきのゝべ(月清)下「庭ふりき籬の野べのむゝの音を月と風とのゝたよさく

りか

補 まがきのもと(新拾)秋上「かけくらき籬のものとさきりトゝくるゝもまたでね

とやかくらん

まかき(狹)四上身を心よまりせぬやうよて(忠見集)一(新古)春「やうきとも草の

もえかん春日野をたゞせるの日よまりせたらかん(元眞集)七「あびくともたのこ

けるかか花をゝき風風のそこをまりせたりれ(古)賀春「つるかめもちとせの後

のゝらなくはありぬこゝろにまかせてゝん(榮)滋春「つるかめもちとせの後

よまりせるもえちよまごちらぬよ人のちりかん(源 手習)卅あづまとりてとい

ふよもあのおきのたえを人々のみぐるしと思へど僧都をさへうらめしけようれへ

ていひきかそれはいとろくてまかせたり。注、其分ニテヒカセタルナリ(枕)心

にまりせるあめり(マカサレ)俗語ナリ(源 竹川)廿「わりをゝやつよきよらんりち

まけを心ひとつよいかゞまかせる(同 空蟬)九身ながら心よえまかすまどくかん

有る(同 薄雲)四よまりせ聞え給ひてもてあし給はんありさまよきゝ給へ

○まらせて(元輔集)四「ほころびて花さきよけりふちをかま匂ひをむは露ま

りせて(元輔集)七(後拾)賀「姫小まつ大ら山のたねをればちとせのこゝま
 せてをみん(高光集)三「打よれるかみまりせてさなばたを立かかくもそ天の川
 ぎり(重之集)七(新續古)春上「風よのみまかせていと梅の花をりてさもどまか
 をもうつさん(枕)廿四さつとひてかの日のさうぞく扇かどの事といひ合はるも
 あり又いとさういして丸の何か只あらんまかせてをさといひて(源少女)八さ
 かる所なく例あらんまりせてささむることかくきびうおこかふ(同 東屋)廿お
 もひねんすてたさはるまにまりせてみるたり(榮衣の珠)二猶まりせてのそあべ
 いことあらねばはほうをめさせ給ひてあまさせさせ給ふ(枕)あやしきけはど
 ものうろをさしまりせつゝるをさりこそ(新古)旅雅「白雲のいく重の峯を
 こえつらんあれぬあらし袖をまりせて
 ○まりせぬ(狹)四上身を心まりせぬやうはて(後)春中よみ「大空まおほふさか
 りの袖もがなさるさくさあを風にまりせト(順集)四十一天川わさ守まかりて
 しが七夕づめまけふまかせト(新古)秋上徽子女王「わくらのあまの川波よるか
 らあくる空まりせせもがな(元真集)一「さる風もことさりりのさくらはか
 人の心にまりせさらん

まかは。水を引(千載)夏大炊御門右大臣「あさりさへはさかりりひむろやまかせ
 水のこほるのさか(風雅)春下西行「まはけおふるあら田ま水をまかはればうれしが
 不まもあくりさづらか(壬二)中「庭の面まりせし水も岩こえてほりませきやる
 さみされの比(つれ)く(五十)龜山殿の御池ま大る川の水まりせられんとて(神
 功紀)三時引灘珂河水欲潤神田而堀溝(和泉式部集)新後拾春「いたづらまこの
 一枝のかりぬめりのこりのさなを風まりすあ
 まよひ(狹)二下とかうさきり給ふまある、所もありり風のまよひまやを
 らおしあけてみ給ふ(源 濤標)廿「あらかりし波のまよひま住よの神をバかけ
 てわをれやのさ(狹)二下木がらしあらくし吹しきたる庭火もいたうまよ
 ひて吹かけらるををらひわびつ(源 總角)七十髪はらづることも給はでそど
 へぬれどまよふをちかく打やられて(同 少女)卅夕ぐれの人のまよひま對面せさせ
 給へり(同 若紫)四きりさつ空のまよひま同(少女)十人のまよひまものうろろ
 ま入給て(同 花の宴)六うへの御局ままりちがふけきともくまよへばいと
 わりあくて(同 玉葛)廿九けさひことまひろくとしてまかでまるる車お不くまよふ
 (和名)十紕 万與布 繒欲壞也(万)八「あとくよひさき守があさ衣かたのまよひ

いたれかとりとん(源 若菜)十一御とねのそこまよひたるつまよりあさにとり
 のうをやうかる文のおしまさたるそ見ゆるを(同)十七御くまをて云々ふ
 かがらうちやりたまへりかばとまもわかかねと露をかりうちふくまよふを
 ぢもなくていとまよらよゆらとして(万)十一「白たへの袖のまよひぬわきも
 子ぐ家のあよりをやまを振りよ(同)十四たもとのくざりまよひまよひ(補)新
 古(冬攝政太 政大臣)「きえかへり岩間まよふ水の泡のまよひやどかる薄をりりや(同)
 春上「霜まよふ空よをれかりがねのあへる翅(同)春雨ぞふる(同)夏八條「一聲
 定家「霜まよふ空よをれかりがねのあへる翅(同)春雨ぞふる(同)院高倉「一聲
 のおもひぞあへぬ郭公たをがれ時の雲のまよひ(同)秋下「ひとりぬる山鳥の尾
 のまざりを霜おさまよふ床の月か(同)同俊「吹まよふ雲を渡る初月のつを
 さよからまよもの秋風。正明云まよふといふ詞上まよひへる如くおびたゞく物
 ぞる事霜おさまよふの霜のおびたゞく置こと風吹まよひの風のおびたゞく
 く事よて迷惑交加の義にあら(新古)秋下 宮内卿 「霜をまつまがきの菊のよひのまに
 おさまよふ色の山のその月(同)同俊「色かゝる霜を袖におさまよひうら枯て行
 野への秋りや

補まよびき 眉引(万)十一「おもひをよいたらば妹がうれしみとゑまむまよびきお

もゆるるも

また又(源 夕顔)十四又人なきさまをいひてつくり侍る(枕)十二清うたて何すよさ
 申つらんとおもへどもまよ人のあらばこそまぎれもせめ(狭)一八下めのと又人ひ
 とりをりぞ車ノりりのりぬる(万)六九たゆるまとかく又もきてとん(源 帚木)
 八人なまよまもかりまこおとをびんまそへて又あらぶひとかくあるべきなど
(同)同六十四いふらひかのことやあさましとて又も給へり(同)玉葛七皆おくらか
 てければ又人もあ(補)紫日記我らやかれがやうよていてるよとあらば又さても
 さまよひありくばかりぞか。釋云此又のかるくいへる詞あり(新古)戀三「これ
 もまよ長きわりれまかりやせんくれをまつべき命あらね(美濃家つと)又この此
 別がやがて又長きわりれまかりやせんといふ意あり
また枕(四)十二まよの日頭中將のせうそことてきのふのよ鞍馬へまうでたりよあ
 よひかたのふさがればたがへまなんぬくまよあけざらんまかへりぬべ(源 帚木)
 帚木(七)七もやうまよいと夕らうよ侍りし時(枕)八とくゆりしきもの、除目のまよつ
 とめてかからまゑる人のあるべき折もさるまよ(源 帚木)廿跡もかくこそかさけ
 ちてうせよしりまよ世よあらば(同)若紫初山のさくらにまたさかりよて(後)春上
 躬恒

「つづこどもさるの光のわりをくはまごまよりの山に雪ふる補（玉葉）春下「里の
とあちりててよを足引の山のさくららのまご盛なり（續後撰）雜中「見一人のかけ
もとまらぬ故郷よまご有明の月のそみけり補またいなや（貫之集）「まごいあやよりつがめども玉のをのたえとたえてのさび
かりなり

まごさえ（夫）廿八「夏がりのあいのふるもの又をえよとくりくさまる冬のいら雪
為家

（新六）信實「さややまのあらのはがいの又をえのものとつたそもをちよなり

中務集「さくらのまたをえいたる枝はつれて

まごからせ（枕）廿二女のひとりすむ家をといたゞいたうあれてついななまもまご
のらせ

またく（源夕顔）卅火のののかままたくきてもやのきのまたたてる屏風のかまこ、
かこのくまぐくおやえ給ふよ。廣足按とも火のきえんとてくらくかる

をも又風よきえんとけるをいふなるべ（狹）三中御とのあきらさえがてにまご
たきて奥のくらくらうて物も見えせ（夫）十九「萩をあめる小屋のかりねのさび一夜風
まごくよひのともいひ

まごく（源玉葛）廿打をて奉り給へるわりぎみのらうたくあひれよておのいま
すをよみちのそごよもてわづらひ聞えてあんまたき侍るといひつゞくれバ

まごね（風雅）戀二永福門院「さぬをいそぐわかれの夜ふかくて又ねひさき曉の
とこ（新拾）戀三よみ「うつりがのゝこる衣をかさきて又ねの床も起うかりけり

（夫）廿七信實「ふかきよまつひとしきりこゑさてゆふつけどりのまたねいてけり

（六百番歌合）（夫）卅六慈鎮「あばあるねさのまたねよつるうを心ガりのゆく末
の夢補（新續古）戀四實清「別れいのつらさかからのおもかけやいひてまたねの夢よ見
ゆらん（同）戀四宗泰「まどろまぬけさのまごねの床よごつらき別の夢かどぞおもふ

（著聞）八ノ十四かへりきてもまごねの心もあらばこそ

まごあき（源葵）七又あう人ごろく、やう（同夕顔）四かくおのいまいたるよろこ
びを又なき事よかこまる（同）五忘たしくおもひむつふる筋の又かくあんおもほ

え（同紅葉賀）五ふのまたあきてをつくゝる（同檣柱）卅「深山木よそねうち
かひゝる鳥の又なくねさき春よもあるかな（同夕顔）十九又かくらうがのよき隣の
よういあさを（空穂藏開）上ノ十七あよさふらふ事の仲忠の朝臣の又あき事よ思ひ給
へて侍めりくわかん（源明石）四かゝる御身の又あき例よづみ給ひぬべきこと

のいとどうかあしきよ

まどら 班(枕)九うら衣よりいものうつりてまたらよあらんか(同)十六馬のむ

らされのまどらつきたる(伊勢物)九かのこまどらよ雪のふるらん(宇治拾)四ふと

返されさる橋の下よまどらかるこくちあそのきりくとしてるされバ(實方集)弓

のけちよまどらまよく雪のふりかゝれるを入道少納言「まへがたのまたらまくを

るゆきえればとあるよ「ちりへの山ぞおもひやらる」(重之集)秋くれバなくや

をうりのまどらゆき(万)まどらでろも(新猿樂記)甲斐班布

まどら 曼陀(源幻)七極樂の曼陀羅など此さびかん供養すべき(翻釋名義集)七此翻

壇(同)三此云適意又云白華(同鈴虫)初法花のまたらかけ奉りて

またのど(又の)狭(四)下月日もをかかく過て云々又のど一の秋冬の大原野平野を

どの行幸あり(古)戀又のど一の春云々あぞぞこひて云々

またのよ 又の(源夕顔)五十あのはうと給ひて又の夜云々

またのあした 又の(源胡蝶)廿又のあした御文とくあり

またのひ 又の(源蜻蛉)十御使その又の日またつとめて参りたり(同末摘)廿又の日

まへにさふらへバ(同帚木)六十又の日小君めいたれば参るとて

またく(古)誹諧「いつしかとまたく心をさぎよあけて天のかいらせよふやわたら

ん(家持集)「我やどのえの木つきの木月とよつりひのやらん心またくか(源東

屋)十いとまこくのとき君よて思ひ取てければ(同)三すべていとまたくをきま

かき心もあり。契云イソク心晋世家速(史記)晋世家 惠公與女期三日至而女一日

至何速也其念之(好忠集)順歌「花薄はよ出とまたき告をゆめ秋よまたけるわがき

かかくに

またく 全(古事記)いのちのまたけむ人の云々(万)四一吾命のまさとむかぎり

(同)十二さねこがいのちまたからめやも(同)十五いのちをよまこくあらバ(空

穗藏開)中ノそとろの君の御もとにこれをいとまたくかへ奉るハ

またく 又々(源少女)十事とてまかづるはかせさいばんどもめして又くふと

作らせたまふ(同橋姫)卅猶まこくよくけし見給へと人をすめ給ひて

またぶり 木の枝の二ツにわかれてま(宇治拾)十四あしたをきてまたぶり杖とい

ふ物つき(源浮舟)七うづちをりうつれかりける人のわざとえたりまふ

ふりに山橋つくりてつらぬきをへたる枝よ(和名)廿河東謂樹岐曰杖楹和名末多布里

またさらよ(万)廿二「百くまの道へ來にをまたさらよ八十島過てわられりゆ

りむ （式）廿二 百の道へ來りしときさちの八十鳥遊りて

またき （全）（新古） 雜下「さへがよの空はすぐくもおおしとまたきやどよもいくよ

かひへん （宇治拾） 十九 此國の人わがみをばまたくして敵を害せんとおもひされ

やおろけよてかやうのたけまけさもものかどよわがその損せられぬべけれ罷

りあぬやうよて候めれ （源東屋） 三 かうけのあたりおそろしくわづらひしきも

のよはばかりおぢをべていとましくをまなきてゝろもあり （同） 叶いとましくか

しこきみよて思ひとりてけれ （方） 卅五 「いのちをよまたくしあらばありき

ぬのありてのちにもあそざらめやも （同） 十二 「あらたまのとのをながくかくて

ひばまことわがいのちまたからめやも （空穂祭使） 廿六 廿七のちまたやあま

りさまのざらんよき人ありみ心またたくらうよものつくさせたくもへ心よくしり

て （能宣集） 三 （夫） 「草ふりとまたきつけたるかや火と見ゆるいふ木のけふ

りかりり （同） 七 （後拾） 春下「さくら花またきあちりそ何よりはるをば人のを

しむどかふる （元輔集） 六 「秋ふのよまたきよゆるきくみれば花のうへともおも

ほえぬりか （中務集） 廿五 五月まゆこの紅葉よつとて「いづれをばまぢもつねでや山

のそのおのれまどきよもとちをめけん （六帖） 下 「露をけてさもとをまもかきも

のをなど秋風のまどきふくらん （日本紀） 豫 （源夕霧） 十 何々の所のよきし給ひて

も御息事しもありがやよとかくおやしみたれんまどきよ心ぐるしとといひ合せて

（同） 廿七 ことしもありがやよまどきよ聞くるしかるべしなどねんし給て （同） 橋姫 廿五

まどきにおほどれさる涙よくれてえこそ聞えさせ侍らね （同） 東屋 六十 まどきよこ

の事さかせ奉らんも心こづかしくおやし給て （新續古） 八 清輔 「月の入朝日のまど

き中空のくらしよまどふ人ぞかあしき （和泉式部續集） 九 日ひるつゝ九月こそいで

よけれといふをきよて「ぬをたまのよるとはいかありせとらをかむる月のまた

さいでぬる （古） 夏 「五月あはきもふりなんほととぎすまどしきほどの聲をきり

ばや （源松風） 廿 けさきりよとけて参り侍る山の錦のまどしう侍るおりのべの色こ

そ盛りし侍りけれ （同） 句宮 九 此君のまどしきよの覺えいとをぎて思ひあがりた

る事よよなくかどものし給ふ （同） 夢の浮橋 三十 母よのまどしきよいふを （大和物）

三 淨藏ノ前 故兵部卿の宮此女のかゝる事またしかりなる時よとひ給うけり （宇

治拾） 十四 廿四 ものがよりまさ事よてこそあらめとまどしきよわらひけれ （補

(万)十九。長歌。こぐやどのうゑ木たちを花よちる時をまたしと來あかなくを
このうらとせ

まさし〜(枕)五、あゝまさし〜とさしあつむあり

補 またび 眞旅(万)廿、一「さびとへばまさびよなりぬいへのもぐさせしころもよあ
かつきよけり

まともかく(千載)戀二、大宮前「又もかく只一筋よきそをおもふこひちよまよふ我
や何かる 太政大臣

補 まどす 奉(高光集)忠清の右衛門督五節たてまどし給ふよ云々それよ入れてと
てまどすとして云々。万葉ニ多シ古事記傳十六廿ニ在リ(万)十、五於君奉者

まれ モアレ(古)戀四、藤原の「君といへばまれみぢまれふトのねのめづらしけあ
ノ約 たいゆき 廿此とゆる女房にまれ(同 晴蛉)六人にまれ鬼よまれか
くもゆる我こひ(源 紅葉賀)廿此とゆる女房にまれ(同 晴蛉)六人にまれ鬼よまれか
へ奉れ(賀茂保憲女集)「松ひきて千よとゆいのるけふしまれふる不どもなく
きゆる初ゆき(顯季卿集)「夕つく日入佐の山よときしまれをりてへてなく不と、
ぎけりか(同)「をりしまれをづ心あし時鳥たびねのそらよかく聲きけバ。とまれ
かくまれなと常よいへり

まれ 稀(源 帶木)初まれよいああがちよ引たぐへ心づくしを御心よおせし
とむむるくせかんあやみくよて(同 蓬生)五まれよ京よ出給ふときひさしのをき
給へと(同)六まれよもことかよひ給ふべき御あたりをまさらよかれ給ひせ(伊勢
物)十六(古)春上よみ「あどなりと名よこそとてれさくら花としよまれある人もま
ちなり

まれら(中務集)十「山ざとにまれらなりける不と、ぎすまよともかかぬ聲をきく
かな(六帖)六、一わがごとく人のまれらよ思ふらし白雲ふかき山ちさの花(拾)雜賀
左大 臣「岩のうへの松よとへんきと〜のよよまれらなるさねぞとおもへバ

まれうと(貫之集)九人の家よまれうとあまたきて柳さくらのもよむれるてあそ
びせる

補 まれのほそとち(堀初)山家「山ざとのまれの細道あ絶てまさきのかづらくる
人もな

まれ〜(源 若紫)廿まれ〜のあさましの御あとや(狹)一、上 四十九 まれ〜ある女と
も、此頃のちてまうでこせ(同)六まれ〜一くどりも書ながし給ふ水ぐきのあ
がれをばめづらしうおさがさき物に云々(同)三、上。今姫君 身もよかゝかれていと

この一ふいをおもひおくかか(美濃家つと)りせまつ露とい風のそやくふれり
まつ意よりあらせ露の風のふれ消る物かれわかせのふくまでの露といふ意なり
(新古) 雑下式子「暮るまもまつべき世かあたる野の末葉の露はあらたつあり
内親王」
(新勅) 雑三兼輔「大和物」「咲はひ風まつほどのやまざくらひとのよりの久しかり
なり。文雄云風ふくべきあひさをかろくいへるをり。まつは今一ツの意あり(新
古) 秋下宮内卿「霜をまつまがきの菊のよひのまよおさまよふ色の山のこの月(尾張家
苞)云まつとい今や」とまつ義はあらせもとあらの小萩露をおもえ風をまつと
とい風のふりたぐちちらんとまで置たる義あり霜のおりたぐちちらうつろ
いむとまで咲たる意まつといふ詞は此義多し心得おくべし○廣足按古今ありそ
てぬいのちまつまのそとをかりうき事ごとく思わざもが此まつもいつりくと
まちいそぐ意にあらせ時來さらばとぐちに死かん其そまでの意あり。今一ツ
まちけりといひて待得ざる意あるありまの條は擧たりまち見しも同
○まつほどすぐ(拾) 物名「そまへ鵜の川なみまけていりぬるまつそとをぎてと
えぞも有かか(後) 雑三よみ「とどりをまつそとをぎはいりてり下葉をかりも
もえちせざらん(中務集) 廿四(續後拾) 離別「いづくぞとまつほどすぎは白山の雪ま

の跡をさづねざらめや(齋宮女御集) 十一とひくるをまつほどをぎは瀨ちどり波間
に猶ぞうらみらるべき

補まつ(枕) 四十二物がさりかどしてゐるほどまつとめいたればまゐりたるは

(源若菜) 上ノやんでとなきまづの人々おれといふおとといよきことなり(續

古) 冬中務卿親王「いぐるべきはしきを見る山風はまづさきざちてふる木葉りか(續千)

秋下慈道 法親王「人よりもまづこそみつれ九重の雲井はすめるよひの月け(新古) 哀傷

太政大臣 攝政「見夢はやがてまぎれぬわが身こそとゆるけふもまづかなしれ(古) 戀

兵衛 五「ちどの山ふもとを見てぞ歸りよいつらき人よりもまづこえととて

まつ 松葉(源惟の本) 卅二「奥山の松葉につもる雪とどよきえよ一人をおもそま

り 補(伊勢大輔集)「おく山の松を氷る雪よりも我身よふふるそとぞそかき

補まつ つとす(源若菜) 上猫のまどよく人よもかれぬはやつかいとながく

つきたりけるをものにひきかけまつそれなるを(同 明石) 二御夢よもたぐおそ

さまあるものゝときつまつそよきこゆと見給ふ(同 紅梅) 廿一まついさせ給へり

こそくるしかりしり

補まつ つりたせ(万) 十五「まをかみかけてぬべと麻都里太須かたみのものを人

地補物言集

のゆふぐれ(玉葉)夏成「都人こともやとふと松の門雲とちむつる五月雨のそら

補まつのき松の木(拾)戀三よみ「まよもえちするせりらで松の木のうちへのとどり

をたのとけるかか

補まつのひ松の火。上松所ニ出

補まつのせみ(空穂 梅の花笠)四 松のせといりりはおどろき云々 中納言平のまさ

あきら松のせみ「松風の聲よくらぶることのねを聞なる、せといりらべざらめや

補まづく(枕)六ノわがきこをまづものきこえんまづく人の、給へること

ぞといへバ(狭)上四、うちわたりの宮づりへよりもまづくとまゐり給ひつゝ

補まつけ(枕)九ノ大藏卿ばかりみゝとき人あまことと蚊のまつけのおつるや

ともきゝつけ給ひつべくこそ有るか

補まづーき(万)五 寒きよそらをこれよりもまづーき人の

補まね(枕)一、わかき人々のまねをしわらへど(同)五、おれがこゑのまねまでい

ひける事あとかたりたる(空穂 樓の上)六十のむまねして打こぞつれといとは

くてえまよひひせ

補まねく(万)十七、ままがこのみちよいでさちさかれなげ見ぬ日さまねみこひ

けむるも(同)四十七「矢形尾のさかを手よをるみま野よあらぬ日まねく月をへ

よれる。日數多く重なる事をいふ詞よて万葉よ多し古事記傳三十三、説あり万葉

をみお擧られたり(万)十五、さかぬ日麻禰久(同)四、五君が使の麻禰久かよへバ

補まねく(兼盛集)「まねかねとあまたの人のまどくかかどみといふものぞたの

かりける(散木)「花すゝきまそほのいとをくりかけてさえせも人をまねきつるか

か(千載)秋上道命法師「花すゝきまねくのさかとりかからとままるもの心なりけり

(新勅)秋上長方「さらせとてたよの過下花をゝきまねりぞ人の心をも見よ(後)秋中

「やともせようゑをめつゝぞわれの見るまねくをさかよ人やとまると(万代)秋上

「岡のべの一むらさゝきほよいで、まねくを見れ秋の來よけり(拾)秋よみ人秋

風をそむくものから花すゝき行方ぞかまねくあるらん(續後撰)秋上「花をゝき

まねのざりせいりよして秋の野風の方をあらま(月詠)七讚岐「ふりぬまのまね

りぬよこそ花すゝき風よゑたがふ心との見れ(六帖)「まねくとてきつるかひかく

花すゝきほよいで、風のそあるかりけり(古)秋上ねやる「秋の野の草のたもとか花を

まきほよいで、まねく袖と見ゆらん(拾)秋よみ人「をみかへおほある野べよ花

まゝいづれをさしてまねくあるらん

まねぶ(源 若菜)卅とづからの夢よのあらせ人の身の事をうたるかり此夢あふ迄又人まねぶかとの給ひて(同 帚木)十目よも耳よもどまるわざをうるとき人よわざと打まねさんや(同)十さてありぬべき方をばつくりひてまねび出す(同 繪合)廿道くく物(同)の師ありまねび所あらん(同 明石)十いぶせきをりく(同)かきなら侍ぬるをあやうまねぶもの侍るこそとねんよかのせんどいわうの御手よかよひて侍れ

まねぶ(源 常夏)二ほかむらのむすめたづね出てかづき給ふとまねぶ人あんあり(同)アリノマ、ニ告ルニイフ詞

まね(万)卅「うらさぶるこゝろ佐麻禰之久かこの天のいづれのかがらふ見れば〇宣長云物の多きことあき事ありこゝろうらさびしき心のあききありまねびいづる(源 螢)十見るやどこをくりりりけれまねび出ればことあることか

まねびよせ(源 浮舟)七まづあけよとの給ふ聲いとようまねびよせ給ふ(枕)三。驚ノ郭公も忍をぬよやあらんかくをいとようまねびよせて木たけき木どもの中よ諸聲よあきさるこそさけがよをかつけ

まねびとる(源 若菜)廿九此ことをまねびとらんとまどひてたよらるのかたくなんありけるを

まねびたつる(源 初音)初まねびたてんも言のそたるまどくなん(同 若菜)上七其ほどの儀式あどもまねびたてんよいと更なりや

まねびそこかひ(榮 布引瀧)十後一條院の御うぶや紫式部のいひつゞけたるおかトことかりまねびそこなひよ中々なればかん

まねびつさふる(源 若菜)上九世の人もまねびつさふるとまか(眞字 榮 殿上花見)廿手よき歌よみまかをさへかへせ給ふ(源 葵)四十さうよもまなよもさまよめづらしきまよのきませ給へり

まん(眞字 狭)四十六女君のまんかやかんかやさまく打とけてい給へる云々

枕(四)蘭一やうの花の時錦帳のもと、かきて末いりあるとあるを云々これが末しり顔にたどくしきまんかよかきたらんも見ぐるかと思ひまのすやどもかく

源(帚木)卅さるまよのまんかをまよりかきてさるまよきどちの女おみよかりば

そぎてかきすくめたる(同 梅のえ)三まんかのまよとたるやどよかんかひよけかきよトこそまよるめれとして

まないの(空穂 藤原君)四十まかいさともたて、いをつくる(同 吹上)下ノまかいた
たて、魚鳥つくる

まかはし(宇治拾)二、まかをしけづり鞘ある刀ぬいて

補 まあかひ (万)五云々まあかひはかゝりてもとあやをいしなさぬ

補 まあづる (續後撰)賀輔親「まあづるの久しきともと成ぬべしすむ山水は影をあら

べバ(相模集)「まあづるもおりるゝかこの松原にいくその千とせかせをうるらん

(長秋詠藻)中「安川はむれるてあそぶまあづるものどかある世を見ざるかりけり

(新千)上 雜 亭子院西川はおそしまりたりける日鶴立洲といふことを題してよませた

まうける 坂上「やま高とおりるくもとまあづるのたてる川邊をひとやみるらん

(同)十七「わあらのうらや道をたづねてまあづるのまなぶる跡はまよとせもがあ

(頼基集)つるすよたてり「かひちりみをまひそれをやまあづるのあがれて千とせ

ありといさるゝ

まあぶと(白文)噺特宜 注目上皮也(万)十六、「さらもんのつくれる小田をそむか

らまあぶとされてまごぞこよをり

まああ(六百番歌合)廣澤池眺望「月のをむそらのよそよもかいらトをまあこにあ

まるひろさいのいけ 補(拾員)「秋の色のまあこよみてるをまひりか門田のかるお
とやまののみぢ

まあこる(源 柏木)廿只今ながらまなこるのどかよそづかきさまもやうもかれて

かをりをかき顔さまあり(枕)三、さぎのいと見るめも見ぐるゝまあこるなどもう

たてよろづよかつかからねさゆるきの森よひとりねトとあらそふらんこそと

かしけれ

まあこ、そふたつあれ(土佐日記)まあこもこそふとつあれさゞひとつある鏡をた

いまつるとて海ようちをめつればいとくちを(空穂 俊蔭)一、俊蔭がりさちのきよ

らよさえのかしこき事さらよたとふべきかなし父母まああよ二つあれとおも

ふほどよ。いたくをしめづるこゝろよいへる詞なる歟

補 まあこ (万)十三長歌 母父は眞名子にあらむ

補 まあむせめ (空穂 藤原君)四十ふこのけけのまあむせめ

まかくときなく(万)四五「うちわたは竹田のそらよ鳴つるのまかく時なく我あふ

らくの(同)廿七、「唐衣きあら山よなくどりのまかく時かく我あふらくの(古)大

歌所「ちもどゆふかづらき山よふる雪のまかく時かくおも不ゆるかあ

まかどり (和名) 三毗 和名万奈之利 目裂也遊仙窟云眼尾

まかび (まかぶ) (千載) 序 ともく 此歌の道をまかぶる事といふよから國日のもと

のひろきふとの道をもまかびせ (源 帚木) 卅 わざとならひまなをねどもすこゝもか

とあらん人の耳よも目よもとまることとねんよおやあるべし (補) (万代) 釋教「千と

びまでまうで、祈るゑるゝあらば學ぶる道は冥加あらせ給へ

まあびり (源 橋姫) 十年頃まなびりよまへることどもふかき心をときゝかせ

奉り

まかびり (源 橋姫) 十年頃まなびりよまへることどもふかき心をときゝかせ
奉り
まかびり (源 橋姫) 十年頃まなびりよまへることどもふかき心をときゝかせ
奉り
まかびり (源 橋姫) 十年頃まなびりよまへることどもふかき心をときゝかせ
奉り

増補雅言集覽卷之卅六終

